保育効果に関する心理学的研究

—保育期間の差の吟味—*

大阪教育大学

田 中 敏 隆**

問 題

集団保育は、幼児の心身の発達にどのような効果をもたらすかの実証的研究は、その一つとして1年保育、2年保育、3年保育から保育期間の差の問題に関連して重要な意味をもつものである。従来までに、保育効果に関する研究としていくつかのものがある。身体的、運動的発達面については、宮内孝ら(1955)、知的発達面も含めたものとして福永かをり(1957)の研究がある。性格、態度面については、津守真ら(1956)、稲田準子ら(1958)の研究がある。さらに、心身の多相面から検討したものに守屋光雄ら(1957, 1958, 1959)の研究がある。

これらの研究を検討してみると、保育期間は、1年よりも2年、2年よりも3年の方が幼児の心身の発達により影響を及ぼしていることを示唆している。しかし、これらの研究の多くは、1, 2, 3年保育児にまたがる研究ではなく、その上被験者群の等質化、施行の時期などに問題を残している。

本研究は、これらの点を考慮して、被験者群は、1, 2, 3年保育にまたがり、それらの等質化は知能テストによって行ない、施行の時期は1年保育児でもおよそ11カ月の保育経験を経ている2月にした。さらに、保育効果を吟味するために、知的面としては川口勇(1966)の主張のように、学齢成熟が本質的にとらえられるとする分節能力を取り上げ、性格、行動面としては、幼児教育の重要なねらいともいわれている基本的生活と社会的生活の習慣や態度を取り上げることにする。

本研究の目的は、保育効果は(1)分節能力に認められるか、(2)基本的生活の習慣や態度に認められるか、(3)社会生活の習慣や態度に認められるかを、同一年齢で保育期

間を異にする被験者群について検討を試みるものである。

手 続 き

1. 実験材料と方法および採点法

a) 分節テスト

使用図形 Ghent, L. (1956) が使用した図形に若干の修正を加えたもので、Fig. 1 に示す重なり図形とFig. 2 に示す埋れた図形である。重なり図形の場合は、各図形組ともテスト用紙(縦15cm, 横19cm)に標準図形を上にし、比較図形を下にして印刷してある。比較図形中に含まれている標準図形と同一の図形は、その大きさは標準図形と同一である。埋れた図形の場合は、テスト用紙(縦15cm, 横19cm)の左に標準図形、右に比較図形を配している。そして、1枚のテスト用紙に、二つの図形組(たとえば、1と2)が含まれている。

テスト方法 まず重なり図形について行ない、次に埋れた図形のテストに移る。テストは個別的である。重なり図形では、被験者を机に座らせ、鉛筆をもたせる。まず予備テストを行なう。「この絵(標準図形)と同じ絵が下の絵(比較図形)の中にあります。上にある絵をよくみて、見落しのないように、それらの絵から探し、その絵(比較図形)の上に丸をつけて下さい」と教示する。被験者がある絵を見落したり、誤って他の絵に丸をつけたりすると、それらのことを指摘し、実験の意味を十分に理解させる。次に本テストをA, B……の順で行なう。そこでの教示は、予備テストの場合と同じであるが、ここでは省略や誤りは指摘しない。

埋れた図形では、Fig. 2 に示されている予備テストをまず行なう。「左の絵は、右の絵の中に含まれていません。その絵を右の絵の中から探し、赤鉛筆であとをたどって下さい」と教示する。誤ってあとをたどった場合、あるいは不能な場合には、正しいやり方を十分に説明し、もう一つの予備テストを行なわせる。次に本テスト

* A psychological study of nursery effect.
—Inquiring into the length of nursing term—
** by Toshitaka Tanaka (Osaka University of Education)

Fig.1 重なり図形

予備テスト

B

D

A

C

E

F

G

H

I

J

K

Fig2. 埋れた図形

を1, 2……の順で行なわせる。

重なり図形, 埋れた図形とも実施時間に制限はないが, 被験者の態度からして, 次の図形組に進ませるようにした。

採点法 重なり図形では, 各図形組について標準図形の各図形を一つも見落しなく分節した場合に1点を与える。埋れた図形では, 各図形組について正しくあとをたどった場合に1点を与える。したがって, 両テストで完全に分節反応したならば17点になる。

b) 習慣や態度の調査

調査項目 基本的生活と社会的生活の二つの調査を行った。前者に角尾稔 (1957) の研究, 後者は坂東義教 (1959 a, b) の研究を参考にして, 調査項目を作成した。基本的生活の調査は17項目で構成され, 社会的生活の調査は自主性 (7項目), 社会性 (11項目), 根気強さ (1項目), 責任感 (3項目), 正義感 (2項目), 礼儀 (6項目), 公共心 (3項目) の7特性の33項目で構成されている。両調査とも3段階評定になっている〔付表1・2〕。

調査方法 基本的生活の調査は親に, 社会調査に当たって, 親と担任教師に本調査の趣旨を十分に説明し, 客観的に評定して頂くようお願いした*。

採点法 両調査とも3段階評定で, 3, 2, 1点を与

える。基本的生活の調査は17項目あるために, 最高は51点, 社会的生活の調査は33項目あるために, 最高は99点になるが, 両調査とも各被験者の得点を100点法に換算して, 個人の成績とした。

2. 被験者と実験期日

a) 被験者は, 6才児と5才児を対象とし, 保育期間の各群の人数 (男女ほぼ半数ずつ) は Table 1 に示すとおりである。これらの被験のIQは, 95~120 (田中びね一式) のものから選択した。いま各群のIQの平均とSDを示すと Table 1 のようで, 各群の知能水準はかなり等質的であるといえよう。これらの被験者は, 大阪市立常盤幼稚園, 私立勝山第一幼稚園, 勝山第二幼稚園の園から選択した。

Table 1 被 験 者

年齢	6 才			5 才	
保育期間	3年保育 3年目	2年保育 2年目	1年保育	3年保育 2年目	2年保育 1年目
人数	54	53	44	41	41
IQ	107.4	106.4	108.2	107.5	108.6
SD	14.5	15.2	13.4	14.6	15.0

b) 実験期日

本研究は, 保育経験の期間の効果について検討するのが目的であるために, 各保育群の保育修了期近くに実験を試みるのが適切であることから, 実験は昭和42年2月に行なった。

* 本調査が, 親と教師の評定にどの程度の一貫性があるかについて, 大阪市立保育所社会研究会 (1968) が研究している。それは3カ月の間隔をおいて再度調査し, 前回との相関値を求めている。それによると, 基本的生活で・674, 社会的生活で・767とかなり高い信頼度を示している。

結果と考察

1. 保育期間と分節能力

保育各期間と分節能力との関係を示したのが Table 2 (6才児) と Table 3 (5才児) のごとくである。これらによると、6才児と5才児とも数的に保育期間の長い程、わずかに優れているが、6才児については3保育期間の差を分散分析によって検定してみると、Table 4 のようである。自由度は2と148である。Fの表から5%の値が自由度2と150で3.06、2と125で3.07であることから、3保育期間に有意差は認められない。

Table 2 保育期間と分節能力：6才児

保 育 期 間	人 数	平 均	標 準 偏 差
3年保育3年目	54	11.70	2.98
2年保育2年目	53	10.54	3.76
1 年 保 育	44	10.20	2.82

Table 3 保育期間と分節能力：5才児

保 育 期 間	人 数	平 均	標 準 偏 差
3年保育2年目	41	9.58	2.66
2年保育1年目	41	9.28	3.14

Table 4

3保育期間における分節能力の分散分析：6才児

Source	df	ss	ms	F	Significant
保育期間	2	30.01	15.00	1.61	not sig
個 体 差	148	1378.63	9.32		
Total	150	1408.64			

Table 5 2保育期間相互の分節能力のt検定

年齢	保 育 期 間	df	t	Signi- cant
6才児	3年保育3年目—2年保育2年目	105	1.03	not sig
	3年保育3年目—1 年 保 育	96	1.97	not sig
	2年保育2年目—1 年 保 育	95	0.70	not sig
5才児	3年保育2年目—2年保育1年目	80	0.46	not sig

次に6才児における保育期間の相互間について、また5才児の2保育期間についてt検定してみると、Table 5に示すようである。これによると、6才児と5才児のいずれにおいても、各2保育期間に有意差がない。

このように保育期間の長短は、図形を分節する能力の発達に数的には僅少ながら影響を及ぼしているようであるが、統計上の検定によると、それらの間に有意な相違

がないことがわかる。

なぜ故に、保育期間と分節能力との間に有意差が認められないのであろうか。これについて主要な解釈が二つ考えられる。①本研究においては、各保育期間の被験者群の平均知能がほぼ等しくされており、そして、課した分節能力は、知能との相関がかなり高い(3年保育3年目 .702, 2年保育2年目 .729, 1年保育 .685, 3年保育2年目 .657, 2年保育1年目 .654)ことから、分節能力の平均も各保育期間群において、ほぼ等しくされやすい条件を備えていたことによるためではないか。②分節能力の発達には、保育の経験的要因よりも、多分に成熟的要因によって行なわれるためではないか。

2. 保育期間と基本的生活の習慣や態度

6才児における保育各期間の、基本的生活の習慣や態度の成績を示したのが Table 6 である。これらの保育

Table 6

保育期間と基本的生活の習慣や態度：6才児

保 育 期 間	人 数	平 均	標 準 偏 差
3年保育3年目	54	86.40	6.33
2年保育2年目	53	85.05	6.95
1 年 保 育	44	82.75	7.80

Table 7

保育期間と基本的生活の習慣や態度：5才児

保 育 期 間	人 数	平 均	標 準 偏 差
3年保育2年目	41	79.88	9.08
2年保育1年目	41	79.22	9.28

Table 8

3保育期間における基本的生活の習慣
や態度の分散分析：6才児

Source	df	ss	ms	F	Significant
保育期間	2	363.76	181.88	3.98	*
個 体 差	148	6760.11	45.68		
Total	150	7123.87			

* $p < .05$

期間の平均値を分散分析してみると Table 8 のようである。これによると、5%の危険率で有意差が認められる。次に2保育期間の相互間の差をt検定してみると、Table 9 のようである。これによると、3年保育3年目と1年保育との間、2年保育2年目と1年保育との間にも5%の危険率で有意差が認められるが、しかし、3年保育3年目と2年保育2年目との間に有意差は認め

Table 9

2 保育期間相互の基本的生活の習慣や態度の t 検定

年齢	保 育 期 間	df	t	Signifi- cant
6 才 児	3年保育3年目—2年保育2年目	105	1.05	not sig
	3年保育3年目—1 年 保 育	96	2.56	*
	2年保育2年目—1 年 保 育	95	2.04	*
5 才 児	3年保育2年目—2年保育1年目	80	.32	not sig

* $p < .05$

られない。

5才児の結果は、Table 7 に示されているが、この年齢層における両保育期間の差は、Table 9 にみられるように有意ではない。

次にどのような習慣や態度が、保育期間の相違によって差が認められるか吟味してみる。これには、Table 8 からして平均値において最も著しい差異が認められた3年保育3年目と1年保育について、調査項目ごとに比較検討を行なってみた。その結果は Table 10 に示すがご

Table 10 基本的生活の習慣や態度についての3年保育3年目と1年保育の調査項目ごとの結果：6才児(%)

品等点 項目	1	2	3	χ^2	Signifi- cant
あ	6.82 (7.41)	75.00 (64.81)	18.18 (27.78)	0	not sig
い	2.27 (1.85)	43.18 (42.59)	54.55 (55.56)	0	"
う	6.82 (7.41)	36.36 (33.33)	56.82 (59.26)	0	"
え	2.27 (1.85)	25.00 (25.93)	72.73 (72.22)	1.96	"
お	2.27 (3.70)	6.82 (7.41)	90.91 (88.89)	1.96	"
か	2.27 (1.85)	9.09 (7.41)	88.64 (90.74)	0.98	"
き	6.82 (1.85)	29.55 (18.52)	63.63 (79.63)	4.90	"
く	2.27 (1.85)	20.46 (11.11)	77.27 (87.04)	0.98	"
け	2.27 (1.85)	31.82 (20.37)	65.91 (77.78)	3.98	"
こ	2.27 (1.85)	20.46 (16.67)	77.27 (81.48)	1.96	"
さ	2.27 (1.85)	45.46 (37.04)	52.27 (61.11)	0.98	"
し	2.27 (1.85)	4.55 (7.41)	93.18 (90.74)	1.96	"
す	13.64 (20.37)	54.55 (46.30)	31.82 (33.33)	1.96	"
せ	4.55 (3.70)	20.45 (16.67)	75.00 (79.63)	0	"
そ	2.27 (1.85)	2.27 (5.56)	95.46 (92.59)	0.98	"
た	2.27 (1.85)	47.73 (37.04)	50.00 (61.11)	1.96	"
ち	13.64 (11.11)	47.73 (44.44)	38.64 (44.44)	0.98	"

とくである。調査項目全体を通して数的に、3年目の保育経験群は、1年目の保育経験群よりもやや優れている傾向が認められるが、 χ^2 検定の結果では、両群間に有意な差を示す項目は一つも認められない。

以上のように、基本的生活の習慣や態度は調査項目全体を包括した成績では、6才児において保育期間に有意な差が認められるが、しかし、そこには数的に著しい相違はない。また、個々の習慣や態度の成績にいたっては、一つの項目も有意な差が認められない。これらのことは、この種の習慣や態度の育成には、集団保育の場合よりも家庭保育の場合における躰が、より密接に関係しているために生じたものと考えられる。

3. 保育期間と社会的生活の習慣や態度

6才児における保育各期間の、社会的生活の習慣や態度の得点を示したのが Table 11 である。これら3保育期間の平均値を分散分析で検定してみると、Table 13

Table 11

保育期間と社会的生活の習慣や態度：6才児

保 育 期 間	人 数	平 均	標 準 偏 差
3年保育3年目	54	91.80	9.30
2年保育2年目	53	82.45	10.60
1 年 保 育	44	79.90	10.70

Table 12

保育期間と社会的生活の習慣や態度：5才児

保 育 期 間	人 数	平 均	標 準 偏 差
3年保育2年目	41	80.20	8.28
2年保育1年目	41	80.06	10.72

Table 13

3 保育期間における社会的生活の習慣
や態度の分散分析：6才児

Source	df	ss	ms	F	Significant
保育期間	2	3939.30	1969.65	21.73	**
個 体 差	148	13414.06	90.64		
Total	150	17353.36			

** $p < .01$

のようである。これによると、1%の危険率で有意差が認められる。次に2保育期間の相互間の差を t 検定してみると Table 14 のごとくである。これによると、3年保育3年目と2年保育2年目との間、3年保育3年目と1年保育との間とに、ともに0.1%の危険率が認められるが、しかし、2年保育2年目と1年保育との間に有意

Table 14

2 保育期間相互の社会的生活の習慣や態度の t 検定

年齢	保 育 期 間	df	t	Signifi- cant
6 才 児	3年保育3年目—2年保育2年目	105	4.82	***
	3年保育3年目—1 年 保 育	96	5.83	***
	2年保育2年目—1 年 保 育	95	1.16	
5 才 児	3年保育2年目—2年保育1年目	80	0.07	

*** $p < .001$

な差は認められない。

5才児の結果は Table 12 に示されているように、両保育期間にほとんど差がなく、それは、Table 14 にみられるように有意ではない。

次にいかなる習慣や態度が保育期間の相違によって、差異が認められるかを検討してみる。これには、基本的生活の場合と同様に、平均値において最も著しい差異が認められた6才児における3年保育3年目と1年保育について、調査項目ごとに比較検討してみた。その結果は Table 15 に示すごとくである。これによると、調査項目全体にわたり、数的には明らかに長期保育群の方が優れた成績を示している。しかし、両保育期間の結果を χ^2 検定してみると、有意差の認められない項目もある。一般的に、自主性、社会性、根気強さ、責任感、正義感に属する習慣や態度の多くの項目に、特にそれらの項目中、言語表現的な行動特性に、長期保育群の方がより優れた成績を示している。他方、礼儀とか公共心に属する習慣や態度の諸特性は、両保育期間に有意な差異が認められない。

Table 15

社会的生活の習慣や態度についての3年保育3年目と1年保育の調査項目ごとの結果：6才児（%）

特性	項目	品等点			χ^2	Signifi- cant
		1	2	3		
自 主 性	ア	13.64 (1.85)	40.91 (12.96)	45.45 (85.19)	19.31	**
	イ	11.36 (3.70)	40.91 (37.04)	47.73 (59.26)	1.96	not sig
	ウ	6.82 (1.85)	43.18 (9.26)	50.00 (88.89)	18.62	**
	エ	4.55 (1.85)	50.00 (5.56)	45.45 (92.59)	26.46	**
	オ	2.27 (3.70)	27.27 (11.11)	70.45 (85.19)	4.50	not sig
	カ	2.27 (1.85)	31.82 (9.26)	65.91 (88.89)	9.80	**
	キ	11.36 (1.85)	54.55 (11.11)	34.09 (87.04)	29.40	**
	ア	20.45 (1.85)	45.45 (11.11)	34.09 (87.04)	30.38	**

社 会 性	イ	9.09 (1.85)	43.18 (24.08)	47.73 (74.07)	9.80	**
	ウ	6.82 (1.85)	40.91 (20.37)	52.27 (77.78)	8.82	*
	エ	4.55 (1.85)	50.00 (9.26)	45.45 (88.89)	21.56	**
	オ	6.82 (1.85)	40.91 (20.37)	52.27 (77.78)	8.82	*
	カ	2.27 (1.85)	43.18 (20.37)	54.55 (77.78)	4.90	not sig
	キ	2.27 (1.85)	40.91 (22.22)	56.82 (75.93)	5.88	nto sig
	ク	6.82 (3.70)	36.36 (22.22)	56.82 (74.07)	3.92	not sig
	ケ	4.55 (3.70)	47.73 (14.81)	47.73 (81.48)	12.74	**
	コ	4.55 (1.85)	25.00 (18.52)	70.45 (79.63)	1.96	not sig
	サ	9.09 (1.85)	50.00 (48.15)	40.91 (50.00)	4.90	not sig
根 強 気 さ	ア	6.82 (1.85)	40.91 (16.67)	52.27 (81.48)	10.78	**
責 任 感	ア	4.55 (1.85)	40.91 (11.11)	54.55 (87.04)	13.73	**
	イ	2.27 (1.85)	38.64 (7.41)	59.09 (90.74)	14.70	**
	ウ	2.27 (5.56)	52.27 (33.33)	45.45 (61.11)	3.76	not sig
正 義 感	ア	2.27 (1.85)	15.91 (9.26)	81.82 (88.89)	8.82	*
	イ	2.27 (1.85)	31.82 (9.26)	65.91 (88.89)	16.66	**
礼 儀	ア	2.27 (1.85)	25.00 (16.67)	72.73 (81.48)	2.94	not sig
	イ	2.27 (1.85)	38.64 (20.37)	59.09 (77.78)	3.92	not sig
	ウ	2.27 (1.85)	9.09 (7.41)	88.64 (90.74)	0.98	not sig
	エ	2.27 (1.85)	25.00 (7.41)	72.73 (90.74)	10.78	**
	オ	4.55 (1.85)	65.91 (51.85)	29.55 (46.30)	2.94	not sig
公 共 心	カ	4.55 (1.85)	75.00 (48.15)	20.45 (50.00)	11.76	**
	ア	2.27 (1.85)	27.28 (7.41)	70.45 (90.74)	6.86	*
	イ	2.27 (1.85)	20.45 (12.96)	77.27 (85.19)	1.96	not sig
	ウ	4.55 (1.85)	15.91 (9.26)	79.55 (88.89)	3.32	not sig

* $p < .05$ ** $p < .01$

以上の結果からして、保育経験の期間は、社会的生活の習慣や態度の成績との間に、かなりの関係のあることがわかる。特に、この行動諸特性は、3年保育3年目において著しく進歩するようである。

要 約

本研究の目的は、保育経験の期間の相違が幼児の分節能力の発達、ならびに基本的生活と社会的生活の習慣や態度の発達といかなる関係にあるかを吟味することであった。

保育経験の期間として、6才児では3年保育3年目、

2年保育2年目、1年保育の3期と、5才児では3年保育2年目、2年保育1年目の2期を取り上げた。これらの期間に属する被験者群の平均知能は、ほぼ等しかった。

(1) 保育期間と分節能力との間には、数的に、長期保育群ほど分節能力に優れている傾向が認められたが、しかし、各保育群間に統計上の有意な差がみられなかった。

(2) 保育期間と基本的生活の習慣や態度との間には、平均値からみると6才児では長期保育群の方が優れている傾向が認められたが、5才児では保育期間による差異が認められなかった。調査項目ごとにみると、6才児においても、長期保育群の方が有意をもって優れている項目が一つもみられなかった。

(3) 保育期間と社会的生活の習慣や態度との間には、平均値からみると、6才児では基本的生活の場合より以上に保育期間の群間に差異が認められ、特に3年保育3年目に著しい進歩がみられた。5才児では基本的生活の場合と同様に、保育期間による差異が認められなかった。調査項目ごとにみると、6才児においては、数多くの項目に長期保育群の方が優れた成績を示していた。このことは、特に、言語表現的な行動特性に認められた。

(2)と(3)の結果は、社会的生活の習慣や態度の形成には、集団保育が重要な役割を果たすことを示し、そして基本的生活の習慣や態度の育成には、家庭保育が重要な役割を果たすことを示唆するものと考えられる。

<付記> 実験を実施するにあたっては、常盤幼稚園長千代先生、勝山幼稚園長三上君子先生、ならびに両幼稚園の先生と父兄にご協力をいただいた。ここに感謝の意をあらわす。

附表1

幼児の基本的生活の習慣や態度調査

幼児の氏名	男	女	幼稚園	3年保育	2年目・3年目
調査日	昭和	年	月	日	2年保育
生年月日	昭和	年	月	日	1年目・2年目
満年齢	才				1年保育 (○で囲む)

調査項目

調査項目記入の仕方 がいとうするところの一つを○で(数字に)囲む。

(あ) ご飯の食べ方。

- 1 いつもよくこぼす。 2 時々2・3つぶこぼすがたい いはきれい。 3 いつもこぼさない。

(い) 茶碗、箸の使用。

- 1 箸は使用でさず、スプーンを使用し、時々たべさせてもらう。 2 いつも茶碗をもち、箸も自分で使うが、魚はむしってもらう。 3 いつも茶碗をもち、箸も自分で使い、魚などもむしる。

(う) 就寝前のあいさつ。

文 献

- 坂東義教 1959 a 保育効果に関する研究(上)。保育, 14, 6—13.
 坂東義教 1959 b 保育効果に関する研究(下)。保育, 14, 7—21.
 福永かをり 1957 2年保育児と3年保育児の差について。保育, 12, 48—51.
 Ghent, L. 1956 Perception of overlapping and embeded figures by children of different ages. *Am. J. Psychol.*, 69, 575—587.
 稲田準子ほか 1958 社会性の発達と保育期間について 幼児の教育, 57, 47—53.
 川口 勇 1966 幼児期の発達と“学齢成熟”天野利武 監修: 心理学への招待。六月社, 261—283.
 宮内孝ほか 1955 1年保育児と2年保育児との身体的差異について, 幼児の教育, 54, 43—46.
 守屋光雄ほか 1957 幼児の発達と保育期間との関係, その1, 幼児の教育, 56, 48—49.
 守屋光雄ほか 1958 幼児の発達と保育期間との関係, その2, 幼児の教育, 57, 7.
 守屋光雄ほか 1959 幼児の発達と保育期間との関係, その3, 幼児の教育, 58, 19—21.
 大阪市立保育所社会研究会 1968 集団保育の中で幼児の社会性をどのように伸ばすか, 一当番を通して, 第15回大阪市保育研究会発表表料, 3—74.
 角尾稔 1957 幼児期のしつけ。教育心理, 5, 13—15.
 津守真ほか 1956 3才児保育の効果について。幼児の教育, 55, 61—65.

(1968年3月18日原稿受付)

- 1 ほとんどしない。 2 たまにわすれる。 3 いつもする。
- (え) 寝床につくとき。 2 寝床までついていってもらうが一人で寝る。 3 たいてい寝床に一人でいって寝る。
- 1 そいねをしてもらわないと寝ない。
- (お) 夜尿。 2 時々する。 3 全然しない。
- 1 週に1〜3回ほどする。
- (か) 短い靴下はき。 2 時々はかしてもらう。 3 いつも一人ではなく。
- 1 いつもはかしてもらう。
- (き) 長い靴下はき。 2 時々はかしてもらう。 3 いつも一人ではなく。
- 1 いつもはかしてもらう。
- (く) 下着の着たり脱いだり。 2 時々してもらう。 3 いつも一人です。
- 1 いつも人にしてもらう。
- (け) 服の着たり脱いだり。 2 時々してもらう。 3 いつも一人です。
- 1 いつも人にしてもらう。
- (こ) 前ボタンのかけはずし。 2 時々してもらう。 3 いつも一人です。
- 1 いつも人にしてもらう。
- (さ) 靴をはく。 2 一人ではけるがひもが結べない。 3 いつも一人ではけ、ひもも結べる。
- 1 いつも人にはかしてもらう。
- (し) 洗顔。 2 時々人に洗ってもらう。 3 いつも一人で洗う。
- 1 いつも人に洗ってもらう。
- (す) 食前の手洗。 2 時々忘れて洗わない。 3 いつも忘れず一人で洗う。
- 1 いつも注意されて洗う。
- (せ) 用便後の手洗。 2 時々忘れて洗わない。 3 いつも忘れず一人で洗う。
- 1 いつも注意されて洗う。
- (そ) 大便の自立。(紙の使用) 2 なんとかできる。 3 完全にできる。
- 1 できない。
- (た) 起床後のはみがき。 2 時々忘れてしない。 3 いつもブラシを上手に使用してはみがきをする。
- 1 はみがきをしない。
- (ち) 風呂での体の洗。 2 前の部分は、時々自分で洗う。 3 前の部分は、いつでも自分で洗う。
- 1 いつも人に洗ってもらう。

付表2

幼児の社会的生活の習慣や態度調査

幼児の氏名	男	女	幼稚園	3年保育	2年目・3年目
調査日	昭和	年	月	日	2年保育
生年月日	昭和	年	月	日	1年目・2年目
満年齢	才				1年保育 (○で囲む)

調 査 項 目

調査項目記入の仕方 該当するところの○で(数字に)囲む

A 自 主 性

- ア. 自分の気持や意見を一人で云える。 2 時々云える。 3 いつも云える。
- 1 いつも云えない。
- イ. 歌やおどりをすすんでする。 2 時々する。 3 いつもする。
- 1 いつもしない。
- ウ. 仕事(遊具や教具など)のあと始末をする。 2 時々する。 3 いつもする。
- 1 いつもしない。
- エ. すすんで仕事をしようとする。 2 時々しようとする。 3 いつもしようとする。
- 1 いつもしようとししない。
- オ. なまけたり、なげやりな態度が見られない。 2 時々見られる。 3 いつも見られない。
- 1 いつも見られる。
- カ. 自分のことは自分でする。 2 時々しない。 3 いつもする。
- 1 いつもしない。
- キ. 人まねをしない。

- 1 いつもする。 2 時々する。 3 いつもしない。
- B 社 会 性**
- ア. 人前で話することができる。
1 いつもしない。 2 気がむくとできる。 3 いつもできる。
- イ. 先生に話しかける。
1 いつもしない。 2 気がむくとする。 3 いつもする。
- ウ. 友達と話し合いができる。
1 いつもしない。 2 気がむくとできる。 3 いつもできる。
- エ. だれとでもよく遊べる。
1 いつも一人で遊んでいる。 2 気がむくと遊べる。 3 いつでも遊べる。
- オ. 人と協力する態度が見られる。
1 いつでも見られない。 2 気がむくと見られる。 3 いつでも見られる。
- カ. 人を押しのけたり、じゃまをしたりしない。
1 しょっちゅうする。 2 時々する。 3 いつでもしない。
- キ. 自分勝手なわがままなふるまいが見られない。
1 しょっちゅうする。 2 時々見られる。 3 いつも見られない。
- ク. けんかをしたり乱暴したりしない。
1 しょっちゅうする。 2 時々する。 3 ぜんぜんしない。
- ケ. 人に迷惑をかけることはしない。
1 しょっちゅうかける。 2 時々かける。 3 ぜんぜんかけない。
- コ. 遊具を一人占めしない。
1 しょっちゅうする。 2 時々する。 3 いつもしない。
- サ. 友達の困っているのを見ると助ける。
1 いつもしない。 2 時々する。 3 よく助ける。
- C 根 気 強 さ**
- ア. やりはじめたことは、完成するまでねばる。
1 いつも途中でやめてしまう。 2 時々途中であきらめる。 3 いつもやりとげる。
- D 責 任 感**
- ア. いいのがれをしない。
1 しょっちゅうする。 2 時々する。 3 いつもしない。
- イ. いいつけられたことをしっかりやる。
1 いつもしない。 2 時々しない。 3 いつもする。
- ウ. 持物を忘れることはない。
1 しょっちゅう忘れる。 2 時々忘れる。 3 決して忘れない。
- E 正 義 感**
- ア. 弱いものいじめをしない。
1 しょっちゅうする。 2 時々する。 3 決してしない。
- イ. ごまかしやウソをいったりしない。
1 しょっちゅうする。 2 時々する。 3 決してしない。
- F 礼 儀**
- ア. あいさつがよくできる。
1 いつもできない。 2 時々しない。 3 よくできる。
- イ. 呼ばれてハッキリ返事できる。
1 返事の声が低くよく聞きとれない 2 普通。 3 いつもよくできる。
また返事をしない。
- ウ. 友達を見下げたりしない。
1 しょっちゅうする。 2 時々する。 3 決してしない。
- エ. 友達に悪口を云ったりする。
1 しょっちゅうする。 2 時々する。 3 決して云わない。
- オ. 行儀正しい。
1 非常にわるい。 2 普通。 3 非常によい。
- カ. 正しい言葉づかいをする。
1 非常にわるい。 2 普通。 3 非常によい。

- contingencies on the acquisition of imitative responses. *J. Per. soc. Psychol.*, 1, 589—595.
- Bandura, A. 1966 Social-learning theory of identificatory processes. (in) D. A. Goslin & D. C. Glass (eds.) *Handbook of socialization theory and research*. Chicago: Rand McNally.
- Bandura, A. & Walters, R. H. 1963 *Social learning and personality development*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Bandura, A., Grusec, Joan E. & Menlove, Frances L. 1966 Observational learning as a function of symbolization and incentive-set. *Child Develpm.*, 37.
- Bandura, A., Ross, Dorothea, & Ross, Sheila A. 1963 Vicarious reinforcement and imitative learning. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 67, 601—607.
- Bruning, J. L. 1965 Direct and vicarious effects of a shift in magnitude of reward on performance. *J. Per. soc. Psychol.*, 2, 278—282.
- Hartup, W. W. 1964 Friendship status and the effectiveness of peers as reinforcing agents. *J. exp. Child Psychol.*, 1, 154—162.
- Hartup, W. W. & Kobasigawa, A. 1964 The effectiveness of peers as reinforcing agent as a function of children's anxiety levels. Unpublished study, Univ. of Minn.
- Hill, W. F. 1960 Learning theory and the acquisition of values. *Psychol. Rev.*, 67, 317—331.
- Kelly, R. 1966 Comparison of the effects of positive and negative vicarious reinforcement in an operant learning task. *J. educ. Psychol.*, 57, 307—310.
- Logan, F. A., Olmstead, D. L., Rosner, B. S., Schwartz, R. D., & Stevens, C. M. 1955 *Behavior theory and social science*. New Haven: Yale Univ. Press.
- Rosekrans, Mary A. 1967 Imitation in children as a function of perceived similarity to a social model and vicarious reinforcement. Prepublication manuscript, Univ. of Minn.
- Rosenbaum, M. E. 1961 Imitation and observational learning. Mimeographed manuscript, Univ. of Iowa.
- Ryan, T. J. 1965 The effects of nonreinforcement and incentive value on response speed. *Child Develpm.*, 36, 1067—1081.
- Stevenson, H. W. 1965 Social reinforcement of children's behavior. (in) L. Lipsitt & C. Spiker (eds.) *Advances in child development and behavior*, Vol. II, New York: Academic Press.
- Stotland, E., & Dunn, R. E. 1963 Empathy, self-esteem, and birth order. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 66, 532—540.

(1968年1月30日原稿受付)

〔田中論文 183 ページからつづく〕

G 公 共 心

ア. 幼稚園のものや友達のことを大切につかう。

1	しょっちゅう乱暴に使う。	2	時々乱暴に使う。	3	いつも大切に使う。

イ. グループの秩序を乱さない。

1	しょっちゅう乱す。	2	時々乱す。	3	いつも乱さない。

ウ. 幼稚園のきまりを守る。

1	しょっちゅう守らない。	2	時々守らない。	3	いつもよく守る。

A PSYCHOLOGICAL STUDY OF NURSERY EFFECT

—Inquiring into the Length of Nursing Term—

by

Toshitaka Tanaka

Osaka University of Education

This study was intended to investigate into effects of the nursing term on infant development. According to a length of nursing term, infants aged 6 years were divided into three groups, i. e. the third year group of 2 years nursing, the second year group of 2 years nursing and the group of one year nursing, and infants aged 5 years were divided into two groups, i. e. the second year group of 3 years nursing and the first year group of 2 years nursing. In each group 41—54 subjects took part in the present study. Intelligence quotients of the subjects were almost equal in each group, ranging from 95 to 120 on the whole. The effects in length of the nursing term were examined on the following points; (i) ability for perceptual articulation, (ii) habit and attitude in basic life, and (iii) habit and attitude in social life. The test for articulation ability consists of 17 questions in terms of overlapped and hidden figures. The inquiry into the basic habit and attitude is made up of 17 items evaluated by parents of the subjects. The inquiry used for social habit and attitude is composed from 33 items evaluated by teachers of the subject.

The main results obtained are as follows.

(1) Relationship between the nursing term and

articulation ability.— The ability for articulation tends to be quantitatively improved, as the nursing term lengthens. However, there was no statistically significant difference among the groups.

(2) Relationship between the nursing term and the basic habit and attitude.—As the nursing term lengthens, the 6-years-old infants are advanced at the average value of basic habit and attitude scores, and the difference in the total average scores was statistically significant among the groups. However, no significant difference was found among the groups in each item investigated. The 5-year-old infants did not show any significant differences among the groups.

(3) Relationship between the nursing term and the social habit and attitude.—The 6-year-old infants revealed more difference here among the groups than they did in the basic habit and attitude scores. The best result was recorded particularly at the third year group of 3 years nursing. The effect of the nursing term was marked in many different items of the inquiry. However, there was no difference in the average scores among the 5-year-old groups.